

# 司教のための社会問題研修会

日本カトリック司教団は2021年12月、「司教のための社会問題研修会」を行い、全国の司教16人、使徒座管理者2人が参加した。テーマは「日本の入管制度の現状と課題」保護されるべき難民、非正規滞在者をめぐって。司教たちは、この問題に取り組み続けている人や当事者を招いて現状を学び、司教として何が出来るか、検討を始めた。研修会の内容を二回に分けて紹介する、その後半。

## 「教会が断ることはできない」

駒井知会弁護士に続き、大阪教区の社会活動センター「シナピス」(所長・松浦謙神父)の事務局課長、ビスカルド篤子さんと、ペルーにルーツのある20歳の大学生、みゆきさん(仮名)が話をした。シナピスは、日本に逃れて来た難民や、さまざまな事情で在留資格のない人たちの最後の場所になっている。その人々への支援を「教会が断ることはできない」と、ビスカ

## 入管の現状と課題

### ② 日本で生まれ育った子どもの声を聞く

ドさんたちは限られた人数で長年、奮闘し続けてきた。みゆきさんの家族もシナピスが支えてきた人たちだ。みゆきさんの両親は、1990年代にペルーから来日した。当時、ペルーは経済が破綻し、テロが横行して命が脅かされる状況にあった。両親は在留資格を得ていなかったが、出稼ぎ労働者としてつましく暮らしてきた。みゆきさんと弟は日本生まれの日本育ちで日本語だけを話す。しかし、両親に在留資格がなかったため、子ども



話に耳を傾ける司教たち

望みはただ家族と暮らすこと

みゆきさんは友人の誘いはりモートでこの研修会に臨み、司教たちにも、はつきりとした口調で語り掛けた。「こんにちは、1990年代にペルーから来日した。当時、ペルーは経済が破綻し、テロが横行して命が脅かされる状況にあった。両親は在留資格を得ていなかったが、出稼ぎ労働者としてつましく暮らしてきた。みゆきさんと弟は日本生まれの日本育ちで日本語だけを話す。しかし、両親に在留資格がなかったため、子ども

てしまった。その後、母子3人が日本で暮らし続けられるよう在留特別許可を求めたものの、17年7月、入管は10代だった一家4人の在留資格を求めてきたが、2015年、最高裁で敗訴が確定。翌年、父親はペルーに強制送還され、西の弁護士14人が、送還を止めるよう、手

当で訴訟を起こした。子どもの最善の利益を最優先する」という国連「子どもの権利条約」にのっとって、最高裁判決の撤回と在留特別許可の付与を求めたが、21年4月に最高裁で敗訴した。

望みはただ家族と暮らすこと

みゆきさんは友人の誘いはりモートでこの研修会に臨み、司教たちにも、はつきりとした口調で語り掛けた。「こんにちは、1990年代にペルーから来日した。当時、ペルーは経済が破綻し、テロが横行して命が脅かされる状況にあった。両親は在留資格を得ていなかったが、出稼ぎ労働者としてつましく暮らしてきた。みゆきさんと弟は日本生まれの日本育ちで日本語だけを話す。しかし、両親に在留資格がなかったため、子ども

「10年も在留資格を求めて声を上げて、何切に過ぎ、」もがいても変わりません。生きて、この現状を伝えることだけだ。気付けば、何もできず」と話す。

司教としてできることを

話が終わると、司教たちはみゆきさんに対し、次々と感謝の言葉や「支えたい」という主旨の言葉を述べた。「どんな支援がうれしいか」という質問に「願わくば、自分のような子どもをこれ以上増やしたくない。」「その問題が簡単に解決しないことも理解して」と話した。同級生も「ご両親の在留資格がなかったために、子どもたちがここまで苦し

「10年も在留資格を求めて声を上げて、何切に過ぎ、」もがいても変わりません。生きて、この現状を伝えることだけだ。気付けば、何もできず」と話す。

司教としてできることを

話が終わると、司教たちはみゆきさんに対し、次々と感謝の言葉や「支えたい」という主旨の言葉を述べた。「どんな支援がうれしいか」という質問に「願わくば、自分のような子どもをこれ以上増やしたくない。」「その問題が簡単に解決しないことも理解して」と話した。同級生も「ご両親の在留資格がなかったために、子どもたちがここまで苦し

言われ、それを受け入まなければならないの。涙を抑えながら話最高裁で敗訴しているため、今は人道配慮に頼るしかない。「親子が暮らしているために何が出来るか」「合い、どうすれば解決日々、ビスカルドさんは考えているという。研修会の最後に司教たちは、今回知ったことに対して、日本の司